会議録

会議の名称	西東京市公民館運営審議会平成21年度第6回定例会会議記録
開催日時	平成21年9月16日（水曜日）　18時30分から20時54分まで
開催場所	田無公民館　第2学習室
出席者	会長：森忠 副会長：渡辺文子 委員：中嶋美沙子、西嶋剛昭、定盛秀俊、千葉桂子、古賀節子、須磨田純子、大島眞之、福島憲子、加藤真理、萩原建次郎、 職員：相原館長、山本主幹、近藤係長、寺嶋分館長、小笠原分館長、玉木分館長
欠席者	柴山隼、上田幸夫
議題	(1)　第5回定例会の記録について (2)　報告事項 1　行政報告 2　事業計画書・報告書について 3　公民館だより編集室報告 4　都公連研究大会企画委員会報告 5　関東甲信越静公民館研究大会報告 (3)　協議事項 1　公運審委員の役割について (4)　事務連絡及び情報交換 (5)　次回の日程について
会議資料の名称	(1)　事業計画書 1　芝久保公民館まつり「講演と立体折り紙ワークショップ」（芝久保） 2　健康講座「ナチュラルヨーガで心も体もリラクゼーション」（谷戸） 3　近代美術講座「後期印象派の絵画を楽しむ4話」（谷戸） 4　身近な薬膳のお話しと簡単な献立作り（駅前） (2)　事業報告書 1　第4回人形劇フェスタin西東京（田無） 2　親子陶芸教室（芝久保） 3　保谷駅前公民館開館1周年記念「ジョイントコンサート」（駅前）
記録方法	□全文記録　□発言者の発言内容ごとの要点記録　■会議内容の要点記録
傍聴者	□有り（　人）　■無し

会議内容

(1)　第5回定例会の記録について

○副会長：
記録の修正についての申し出等を確認する。

○職員：
特にない。

○副会長：
配付の記録のとおりとする。

(2)　報告事項

1　行政報告

○副会長：
報告を受ける。

○館長：
　ひばり公の分館長は引き続き病気療養のため病欠になっている。スポーツ及び文化に係る事務の管理及び執行に関する条例の審査があり、学校スポーツを除くスポーツ部門と文化財を除く文化施策は市長部局に移管するという内容だ。これに伴い、平成22年度当初に組織改正が行われる。公民館は、教育委員会の所属で変更はない。

○副会長：
　特に質疑がなければ、終結する。

　2　事業計画書・報告書について
○副会長：
　質問・意見を受ける。

○委員：
　芝久保公民館まつりの折り紙ワークショップは定員100人だが、どういう方式で行うのか。

○職員：
　講師はベストセラーになっている「カミカラ」の著者で、岐阜からの来館で心配していたが、交渉が成立した。当初ははさみと糊を使って自由に作業させるつもりでいたが、打合せによって、講師の実演を見学し、平面の折り紙が立体に変化する過程を楽しむ。いきなり創作するのは難しいようなので、講師の作品を参加者が楽しむ内容にした。作品で楽しむことと、紙が立体になる驚きを体験する内容だ。

○委員：
　100人も同時に楽しむだけ作品が作れるのか。

○職員：
　20個ほどの作品を多くの人に交代で楽しんでもらう予定だ。

○副会長：
　質疑を終結する。

　3　公民館だより編集室報告
○副会長：
　報告を求める。

○委員：
　9月号の反省。会員募集の記事に誤記があり、訂正記事を載せることになった。全館とも細心の注意で校正することを確認した。10月号1面は、田無公民館ロビーの折り紙装飾を通した地域活動の紹介。サークル紹介は田無公の子どもコーラスグループ「西東京キッズクワイア」。11月号1面は芝久保公民館まつりとサークルは芝久保公のいけばな「花遊会」。12月号は、田無公の障がい者青年学級の30周年を記念する記事を検討している。サークル訪問は、フラダンスサークルの予定。

○委員：
　9月号の4面の空白部分はもったいなかったと感じた。

○委員：

今後注意する。

○副会長：
ほかになければ、質疑を終結する。

4　都公連研究大会企画委員会報告
○副会長：
報告を求める。

○委員：
企画委員会が週末に行われる予定だ。何か要望があれば伝えたい。

○副会長：
特に意見がなければ、終結する。

5　関東甲信越静公民館研究大会報告
○副会長：
出席した委員に報告、感想等を求める。

○委員：
第3分科会、職員の専門性を問う部会に出席した。若い職員の参加が目立った。担当は埼玉県で、県下を3つのブロックに分けて県公連を運営しているということだ。そのうちの所沢市の所属するブロックの報告を受けた。
助言の講師のコメントに「知識を高めるのは大いに結構である」との言葉が印象に残っているが、西東京市でも専門員が多くなり、市の方向性を話し合うことが大事であるとそのときに思った。研修の大切さを大いに感じた分科会であった。私たち委員も勉強会には参加して力量、知識を蓄えたい。

○委員：
第13分科会、地域ネットワークと公民館に出席した。山梨県甲州市のPRビデオの鑑賞からスタートした。合唱コンサートの事例で、市の合併に伴い公民館の様子も様変わりしたそうだ。
発表者は、男性の参加をどうしたら増やせるのか、目的がないと難しいという実体を述べていた。あわせて達成感を味わえる内容の事業を広めたいという決意と必要性を話されていた。
文部科学省の講師から、時間、空間、仲間の「3つの間」が不可欠だというコメントを得た。

○委員：
第3分科会に参加し、職員の専門性の大切さを確認した。
所沢の事例報告の中に、指定管理者制度の下でさまざまな締め付けが起こり、専門職が力量を発揮できない実態があることを報告していた。先ほどの館長からの報告にもあったが、市の組織改定で今後の公民館はどうなるのか。地域に密着しているサークル活動にどのような影響があるのか。市民は、そんなことを知らないままに、ただ公民館を活用している。
公民館利用者や職員が考える今後の「目指す方向性」と行政の考える内容の齟齬、そのあたりを先取りする力量を公民館職員も必要なのだと思った。

○委員：
第2分科会、公運審のあり方分科会に出席。高崎市の事例報告を受けた。驚いたのは、1小学校区に1地区公民館が存在し、その数43公民館。さらにその下に地域公民館が400以上存在するそうだ。地域の中に公民館が根付いていることが、この数だけでも理解できるというものだ。
私は、男性の参加率や参加しない人へのアプローチの方法について登壇者に質問したが、難しい課

題なので半分あきらめているそうだ。それでも団塊の世代をどう取り込もうかとは、ターゲットを絞って努力しているそうで、来ない人を引き入れる悩みは西東京市と同じであった。
　助言者は隣の藤岡市の運審の委員長で、こちらも地域のまとまりのある町で地域活動が活発に行われている様子の報告があった。因みに、藤岡市の公運審の力は相当なもののようで、場所によっては、公民館を中心にした地域づくりを積極意的に推進しているということであった。

○副会長：
　第11分科会、健康・福祉学習と公民館分科会に出席した。新潟県の阿賀野市の事例報告を受けた。平成16年に合併を果たし、福祉の町づくりを目指し市を挙げて活動していると聞いた。市では、先進国のフィンランドの視察を通して「元気作り共同会議」を立上げ実績を上げているそうだ。市の企画課、健康づくり課、福祉課、生涯学習課の4課横断のプロジェクトチームを編成し、市の独自の体操を考案したり、運動指導者の養成も行う、その上で市民サポーターの活躍の場も必要であるという説明であった。また、サポーターは、単なるボランティアということだけでなく、お金の取れる指導者を養成しているという説明も受けた。
　では、これだけの施策にどのように公民館が関わっているのか、関わっていくのかという問いには、明確な答えは示されなかった。

○会長：
　第2分科会、公運審のあり方分科会に出席した。400以上もの公民館を統括する運審は1つしかなく、他に公民館運営推進委員会、なる組織が存在するという。それも7ブロックに分かれており、直接的には利用者の意見は公民館には届かないのではないかと感じた。
　公民館は所変われば、まったく運営も異なり、設備も違う。その違いはこうした研修会の席で知識として受け入れるとして、西東京市としての公民館の方向性や公運審として進むべき事柄等をきちんと考えるべきだ。今後の審議の方法等をこのメンバーで考える機会を持ちたいと感じた。

○副会長：
　報告を終わる。暫時休憩する。

（19時05分休憩）
（19時15分再開）

(3)　協議事項
　1　公運審委員の役割について
○会長：
　先月に引き続き、公民館運営審議会委員の役割について、萩原委員のレクチャーを受けたい。

　（萩原委員のレクチャー）

○会長：
　疑問に思う点などがあれば質疑を受ける。

○委員：
　話しを聞いて、1点思ったことがある。やんちゃな青年たちは人との関わりはできているのだと思うが、一方、引きこもりの人への対応が社会問題なのだろうか。人との接し方がわからない人に対して、どう施設に引き出すのか。外へ出たがらない子どもたちをどのように引っ張り出すかだろう。

○講師：
　引きこもりの人に対しては、基本的に1対1の対応になる。レンタルお兄さん、お姉さんという関わ

りが必要となる社会構造になってしまっている。まずは手紙を出して反応を見る、閉じた心に優しくノックをする。もしも反応があれば、隣町など利害の薄い場所で会うことからスタートする。こうした支援をアウトリーチ型と呼んでいる。

○委員：
　そのような状態になる前の対応はないのか。

○講師：
　中間支援の場がその役割をこなすという期待が持てるが、相当敷居を低く構えないと難しいことと思う。

○委員：
　引きこもりの例は、公民館では少しばかり荷が重いと思うが、児童館などで若い人の力をよく活用している例が見受けられる。小さな子どもは、若い人の言うことは良く聞く。子どもにとってすれば、大人との中間の存在、歳も近い。完璧な大人は子どもも用心をすると思う。それは、説教や注意が先に立つからだと思う。
　子どもたちは、大人がお膳立てした場所や営みには来ないと思う。ゆう杉並では、高校生会議があり、自分たちで決定して、行える仕組みがある。

○講師：
　規制もゆるく、自分たちが作り変えることができる場が大切なのだ。

○委員：
　地域に子どもの居場所が少ない。中学生がたむろしていると注意を受ける。公民館のロビーで集まっていたら警備員に怒られた、という事例もある。公共の場を大人だけの理屈で作ることがよいものか疑問に思うことがある。子どもたちが作った場を認めてあげられる地域であることが大切なのだろうか。
　公共施設は、子どもたちだけのグループだと貸してもらえない。東伏見のコミセンのように、青少年を支援する大人の組織が大事だと思う。今の大人たちは、自分たちが施設を活用することだけで精一杯だろう。行政も地域も認めたいと考えていたとしても、何をしたらいいのか模索している段階から抜けられていない。

○講師：
　神戸市では悲惨な少年事件に端を発し、10年前に中高生の居場所を増やすことを市長公約として掲げ、新しい施設を作るのではなく、例えば市庁舎のロビーをパーティションで区切る程度のスペースを用意し、青少年を支援するボランティア組織の市民に見守らせている。そこでは、自習の場にだけはしたくない、という発想を実現するために、自由記帳の落書き帳を置いて、その記載事項を実現していくという手法をとっている。
　ちょっとした空間や隙間で中高生タイムのような時間を持ち込むことはどこでもできるのではないか。東大和市の中央公民館では、夏休み期間中のロビーは中高生に開放することに毎年なっている。中高生のうちから公民館が使えることを教えるよい機会かと思う。

○委員：
　私が中学生のときは、ほぼ学校が居場所であったと思うが、今はそれが変化しているのではないか。実態はどうなのか。

○委員：
　今も昔も、学校の居場所としての位置づけはそれほど変化ないと思うが、どうであろうか。放課後

の教室等は、部活動や生徒会活動に使われるために、何もしないでいられる場というのはごく限られる。近年は、教師も生徒から意図的に話しを聞くということも行っている。このことは放課後だけということではない。ただ、巷間言われているように、子ども一人一人と向き合う時間にゆとりがなくなっているのは事実だ。

○委員：
　たぶん学校は変わっていないと思うが、子どもたちが遊ぶ場所は少なくなっている。地域に居場所がないという意味だ。何となく集まる場、町で中学生が大勢居ると「怖い」と思われてしまう。
　都市では世代が分断されてしまい、自分もそうであったと記憶するが、子育て中の親は小さな子のことしか眼中になくなる。考えられなくなるのだろうか。皆がそうなってしまうので、他者の気持ちを忘れてしまう。大きな子どもには、違和感すら持ってしまうということだろうか。

○委員：
　学校だが、昔は地域からそれほどの期待されていなかったと思う。ところが今は、縦社会でつながっていられる唯一の場ということで、地域からの過大な期待が寄せられている。また、同世代も結びつくのは、唯一といっても過言ではないのかと思う。
　私は、学校が終われば地域で遊ぶことが多かった。授業が終われば、学校で集うなどということはなく、地域で遊び、おなかがすいたら帰宅するという子供だった。ところが今は、地域によっては幼い世代が集える唯一の場になっているところもあるそうだ。どこの学校でも、縦割り活動を盛んに行い、社会性を学校で学んでいる。

○講師：
　横浜市のある校長が、コミュニティー作りを実践しているという。今の話のように、現在学校の持つ社会教育的な機能をチャンスに変えるという発想で学校運営を行っていると聞いた。確かに、学校ばかりに期待がかかるというきらいがあると思う。子どもは様々な場に回遊し、そんな中で大人になる。色々な他者との関わりが必要だ。

○委員：
　そうなると家庭と地域が大切ということになってくるだろうと思う。ところが、施設環境が整うと、必ず功罪が現れる。公園ができるとルールばかりが先行するのが例示だろうか。
　家庭も学習塾通いに力を注ぎ、自分の子のことばかりを気にする。地域の中での人間関係を築くこともこれでは難しくなるというものだ。普通の子も、やんちゃな子も同居しているのが良いことなのに、今は、子どもの世界も同質な子供同士の関係に固まってしまう。多くの人との関わりが大切なのに、私も自分の子どもに知らない人との接触を止める実態がある。

○講師：
　京都の施設も、引きこもりとやんちゃな青年のための施設ではない。多くは普通な青年が通ってきている。

○委員：
　普通の子どもは、そういう場で過ごす時間は少ないのではないかと思うが。

○講師：
　多くは、自習の場として使っている。
　ここは青年のための施設なので、様々な境遇の青年たちが関われるチャンスを職員が用意している。小さな共生社会を築こうと努力している。

○委員：

昔は近所の人が、悪いことをしているやんちゃ坊主を叱ってくれた。今は、おっかなくてそんなことは無理な話である。

○講師：
今でも人間関係が築かれている場合は可能だが、都市化でそれは不可能に近い。

○委員：
親に怒られただけで切れる子もいると聞く。

○委員：
親の中に、自分の責任を転嫁している人が多いのではないか。何か注意をすれば逆切れするのは大人も同じこと。学校で怪我をしただけで学校の責任を問う。親も子も同じような対応が見受けられるために、人間関係が築きづらいと思う。

○講師：
若者が子どもを支援する関係作りが大切なのかと思う。青少年が互いに支援しあう。学生もスタッフに受け入れると、若い人と子どもの関係もできやすくなる。

○会長：
先ほど学校の事例が紹介されたが、小と中では人間の成長過程も差が大きく、対応も異なると思う。当然のこと、学校の子どもに対する接し方も異なる。行動範囲も異なるので、小学生ならば注意もできるが、中学生に対しての注意が難しいのは当然、それがいけないことなのだろうか。
小学生なり、中学生なりの居場所が大切なのかと思う。地域で育ち、社会に巣立つときに帰る場所があることが大切だろうと思う。大人が努力すべき事項だ。

○委員：
10月号の公民館だよりに寄稿した内容だが、全国学力調査がスタートした。その中に「地域」に対する質問が99項目あった。これを子どもたちは40分間で回答した。1問当たり20秒間隔で回答しないと間に合わない計算だ。そのとりまとめが、行政関係者の中で注目を浴びたと聞いているが、子どもたちは今述べたとおりなので、本当に考えて答えたのだろうかと疑問に感じなくもない。おそらく、自分の幸せ度を尺度にでもして、無意識のうちに回答したものと思う。
今年度も同じような設問として「地域の行事に参加しているか」という問いがあり、地域に公民館のような施設もなく、PTA不存在で町内会も少ない地域の学校はおのずとその数値も低くなってしまう。回答する子どもらは、学校行事なのか、青少年育成会が行ってくれた地域の行事なのかのも、短時間の中では判断もつかないままに答えてしまった。子どもたちは責められないと思う。
学力と地域意識についての調査だということなのだろうが、数字は一人歩きをするので用心しなければならない。これによって、ますます学校への期待や家庭の存在が困難にならなければ良いと思う。

○会長：
その数字だが、先ほど関東ブロック公民館大会の報告をしたが、地域の中に400もの地区公民館がある市と市内に6施設の西東京市とを比較して、地域活動の差異を計っているのと同じようなものだと聞こえた。文部科学省が集めたデータをどのように使おうと考えているのかはわからないが、参考程度にはなったとしても、地域差を考慮せずに評価をしても価値を感じられない。青少年の居場所は、学校だけではないはずだ。

○委員：
誤解を招かないために補足したいが、家庭と学校は表現しやすいが、この都会では地域は見えにく

いということだと思う。

○委員：
　今の学校からの報告を聞けば、地域によっては行事がないということが明白だと思う。そうなると、その学校区をターゲットにして公民館が行事を行うという必要があるのではないか。

○委員：
　今申し上げたとおり、学校区に公共施設が少ないところは当然ある。しかしそうした地域の校長は、落ち着いた住宅街の特長を生かした運営を考えると思うし、私も離れてはいるが、谷戸公民館を訪ねて地域のサークルなどを紹介してもらう努力はしているので、直ぐに何かを求めているということではない。

○委員：
　確かに、地域は、捉えにくくなっているのかと思う。大人だって、そんな項目で質問を受けたら、どう答えたらいいのか苦慮すると思う。ましてや子どもは当然のことだ。
　何を地域で受けていくのか、そうした答え探しを公民館が中心になって行ってほしい。

○委員：
　芝久保公では、1年にたった2日間のことであるが公民館まつりを開催する。そこには、保育室を使う若い母親と3中のPTA、展示のために集まった利用団体、ソーランの会の発表があり、育成会も関わる、ということでいろいろな地域団体が集合すると年代層も幅広くなる。若い母親たちは子供のことが気になるらしい。実行委員をするのに子連れではいけないという意識があるのだそうで、それを他の年配者の団体が幼児の面倒を見てあげることで、親は安心する。面倒を見た大人と幼児が仲良くなる。もっと若い世代になると、3中の生徒も手伝いに来る。そのときだけでも、地域のつながりがそこには存在する。

○講師：
　京都の青少年館は、枚方市の公民館活動をモデルにして運営していると聞く。そこには、地域づくりの視点が色濃く示されている。

○委員：
　先ほどの全国調査のことであるが、小学校単位で困っているということが分かったのならば、そこを支援するという関わりができないものか。調査結果が示しているのであれば、私たちや公民館は、それを支援する役割を担う必要があると思う。

○委員：
　例えば住吉公民館が移転をして、住吉小の学区域の公民館はなくなったが、その後住吉会館・ルピナスがオープンした。もちろん公民館ではなくなったが、当時とは異なる役割の施設も入り、その機能を含めて地域の人がどのようにその施設を使うことができるのかが大切なことなのではないか。地域の人々がどう施設の特長を生かして地域コミュニティーを作ることを支援できるか、その仕掛けづくりなのではないか。

○委員：
　地域の住民がどう施設を生かせるかというようなことではなく、公民館や公運審は、小学校に対して何ができるのかを考えることが必要だと、データは示しているのではないか。

○委員：
　学校も地域の団体に声をかけて努力している。今すぐ公民館に求めたいのは、いろいろな地域行事

があるときにはチラシやポスターのような情報を提供してほしいということだ。

○委員：
　地域によって差があることが今の議論で理解できたと思う。けやき小の学区域には地域の育成会があり、児童館が2つある。地域資源を生かした活動をしていきたいと感じた。

○委員：
　西東京市の中でいろいろな情報を得たときに、直ぐに行動に移すことが大切なことであろう。公民館が地域や学校に対して何ができるのか、そこを詰めないでいると、いずれは情報も出てこなくなるのではないかと考える。

○委員：
　大変学校の心配をしていただき感謝したい。ただ、何か必要なことがあれば、相談ができる体制ということも大切なことだ。今のことからも、地域情報や行事を周知できる工夫を校長会としても努力してみたい。
　私の学校では、商店街との関係、公民館との関係も多く持っている。地域の人々は、自分たちが学校を支えていると自負される方も多く、例えば我が校の駅伝大会は、商店街の方々が全面的に支えてくれている。ありがたいことだと思っている。

○委員：
　いろいろな情報を知るという必要はあると思う。こうした議論を来年度の事業にどう生かすのか、ということについて意見を述べることが大切だろうと思う。市民企画事業の報告会で、参加者の中からどうして公運審の委員は来ないのか、という意見が出た。いろいろな機会を捉えて、参加して、市民が考えていることを聞いて、見ることも必要だろう。生の情報をつかんで提言することが必要か。そうなると、今直ぐにできることは少ないのかもしれない。

○講師：
　本日の議論は大変参考になったし、有意義なものであると思う。

○会長：
　特に結論は出なかったが、こうした話し合いの場が重要だと改めて感じた。これを次の議論に引き継いでいければ幸いだ。質疑を終結したい。

(4)　事務連絡及び情報交換
　（特に無し）

(5)　次回の日程について
　10月28日（水曜日）18時30分
　於：田無公民館　第2学習室

○会長：
　他に意見がなければ、閉会とする。